

## はじめに

RICH NEWS 第3号は、平成17年度後半の活動をまとめております。

昨年度はあらたな活動として、昨年度実施した旧日向別邸(熱海市)の調査をもとに、旧日向別邸の魅力と価値について報告会を実施しました。東京理科大学 伊藤裕久教授をはじめとして研究室の方々のご協力により、また熱海市の後援を得て、起雲閣(市指定文化財)において会を催すことができました。

今後も外部との協働作業を含め、より広く情報を発信できるような法人活動を、会員皆様の参画により、さらに充実したものにして行きたいと考えています。

## 活動概要

平成17年度は、旧日向別邸の報告会をはじめとして、講演会2回、見学会1回を実施しました。また、調査業務2件を受託実施しました。

各活動とも多くの方に参加していただき、非常に活発なものとなりました。特に、曳家工事見学会は予想した以上に興味も高く、会員外からも多くの参加者がありました。以下に主な活動について報告します。

## ■ 報告会

熱海市指定文化財旧日向別邸公開記念・

旧日向別邸予備調査報告会

ブルーノ・タウト「旧日向別邸」の魅力を探る

- 日時 平成17年12月10日(土) 14:00～17:00
- 会場 熱海起雲閣「ギャラリー」
- 主催 NPO 法人歴史建築保存再生研究所
- 後援 熱海市文化交流課

## ○報告会プログラム概要

- |                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| ・挨拶                  | 藤盛 紀明(NPO RICH) |
| ・主旨説明                | 松波 秀子(NPO RICH) |
| ・熱海の別荘地開発と旧日向別邸の来歴   | 杉山 経子(東京理科大学)   |
| ・旧日向別邸の魅力と歴史的価値      | 伊藤 裕久(東京理科大学)   |
| ・タウトの色彩と旧日向別邸の色彩調査   | 斉藤 理(東京理科大学)    |
| ・タウトの日記に見る旧日向別邸設計の経過 | 山名 善之(東京理科大学)   |
| ・旧日向別邸の構造的評価         | 林 章二(NPO RICH)  |
| ・今後の保存活用             | 小松 久男(熱海市文化交流課) |

平成17年3月に熱海市より受託、実施した「旧日向別邸保存修復予備調査業務」の調査報告会を、平成17年9月に一般公開されたのを機に開催



しました。当初、参加者50名の予定で準備をしましたが、一般の方の関心も高く、長野県をはじめ遠方からの参加もあり、最終的に85名の参加者で会場一杯となり非常に盛況となりました。

報告会の内容が多様なものであったため、いろいろな立場の人に満足していただいたのではないかと思います。質疑も、タウト個人に関するもの、熱海市の今後の活用方針に関するものなど多岐にわたるものでした。



建物公開後の見学者も非常に多く喜ばしいことですが、一方、建物の傷みを考えると運営上難しい問題も生じていました。そのため、熱海市では見学に予約制などを設けて対応しています。平成 18 年4月には重要文化財指定答申がされ、本会の業務が重文指定にかばりか貢献できたのではと自負しております。ぜひ、一度、旧日向別邸を見ていただきたいと思います。

## ■講演会

### [近世城郭の保存と修復]

#### 一石垣に残された九州の近世城郭史一

- 日時 平成 17 年 12 月 5 日(月) 15:00～17:30
- 場所 清水建設技術研究所
- 講師 高瀬 哲郎

(佐賀県立名護屋城博物館 学芸課長)

参加者 52 名



高瀬哲郎先生からは、「石垣に残された近世城郭史—九州の城にみる豊臣秀吉の影」と題して、歴史的な観点からの城郭史について、また、近世城郭の保存修復の事例や名護屋城の発掘調査についてお話いただきました。石垣構造などについて教科書にもみることができないかなり細かい部分までの話がありました。石垣の保存修復に関しては、建物に比べ専門家が少ないため、修復工事のグレードに大きな差があること、専門家が少ないが故に不十分な工事も多いなどの問題点が提起されました。配布資料には、文化財としての石垣工事の調査などの手順が示されており大変参考になるものでした。また、高瀬先生の講演に先立ち、安河内孝氏(清水建設土木事業本部)より、現場での石垣保存修復工事との関わりから、皇居中之門修復工事の状況をうか

がいました。

### [歴史的建造物の保存制度の現状と限界]

- 日時 平成 18 年 3 月 17 日(金) 15:30～17:00
- 講師 後藤 治 (工学院大学教授)
- 場所 清水建設技術研究所
- 参加者 55 名



後藤治先生は、もと文化庁建造物課に在職され、登録文化財制度の立ち上げに尽力されており、現在、登録文化財が5,000件を超えたところで、タイムリーな講演内容となりました。日本における保存制度の現状を海外の例と比較した理解しやすい説明で、日本の都市においては伝統的建造物の保存地区が見られず、歴史的建造物の保存再生の単位が建物単体であるなどの話がありました。また、日本の特質として災害への対応が重要であるとの考えが示され、価値の継承と性能の向上の調整が着目点として話され、地震時に破損した場合の責任は誰がとるのか、行政、設計者、施工者なのかなど、新築にも通じる問題点が提起されました。

まとめとして、保存において地域計画、都市計画へ展開を図る上で、・付加価値を呼べる仕組づくりが必要であること、・耐震化・不燃化を克服した保存としての補修方法の再考、新しい評価手法の開発、・木造をもっと見直す必要あるとの考えが示されました。

文化財を取り巻く状況は、多様な問題をはらんでいることをあらためて再認識させられた話でした。問題への取り組みをもっともっとスピードアップさせないと、周辺環境の変化のスピードに飲み込まれてしまうような危機感を感じました。

## ■「旧学習院・昭和寮(現・日立目白クラブ)物語」

東京理科大学 杉山経子

### はじめに

JR 山手線に乗り、高田馬場から目白駅に向かうと、進行方向左側の高台に、白い箱型の建物群が見えてきます。上部に十字型の線形が並び、アーチ型の窓を持つ建物が連なる姿は、「何かしら？」と興味を誘います。この建物こそ、現在「東京都選定歴史的建造物」に選定されている「日立目白クラブ」です。建物の前身は、「昭和寮」と呼ばれる学習院の高等学科の学生寮で、昭和3(1928)年3月に竣工しています。「昭和寮」には、給仕付きの食堂が備えられ、寮生には一人ずつ個室が与えられるといった、当時では類まれな学生寮でした。

では「昭和寮」の建物について、宮内庁に残された史料<sup>注1</sup>を基に、振り返ってみましょう。

### 「昭和寮」建設の背景

明治10(1877)年、神田錦町に創立された学習院は、日本における最も古い教育機関の一つですが、明治41(1908)年に目白にキャンパスを移し、現在に至っています。明治後期に実施されたキャンパスの郊外への移転は、東京では極めて早い時期のものであるといえます。

移転時の目白キャンパスの建物は、文部省技師である久留正道の設計で、文部省建築の要素を取り入れた木造建築でした。また当時の学習院は全寮制で、6棟の寄宿舎と医務部病室などの付属施設で構成され、寄宿舎施設も充実した計画がなされていましたが、寮舎は4人部屋で、1階に自習室、2階に寝室を持つ簡素で合理的なものだったのです。

華族の子弟の学校である学習院としては、意外なイメージかもしれませんが、背景には、当時の乃木希典院長の「集团的規律の下で、全生活的な教育訓練を受ける」という教育方針がありました。

一方、大正12(1923)の改革により、全寮制は廃止され、学習院の寄宿舎制度は大きく転換します。寮生には自立した生活を過ごし、上流階級にふさわし

い社交や礼儀を学ぶことが要求され、欧米の寄宿舎制度を重視したものに变化していきます。そこで誕生したのが、「昭和寮」です。

### 「昭和寮」とは

「昭和寮」は、学習院キャンパスから続く武蔵の台地の高台にある約2,730坪の敷地に、本館、4棟からなる寮舎、官舎、門衛所の7棟で構成されました。設計は宮内庁内匠寮<sup>注2</sup>、施工は安藤組(現・安藤建設株式会社)です。入口正面に本館が位置し、南側の見晴らしのよい傾斜地に沿って寮舎が並んでおり、表側に公的空間としての本館を、裏側に私的空間である寮舎を配置した計画でした。建物は、スタッコ壁、スペイン瓦、アーチ窓、小屋根を乗せた煙突といったスパニッシュ・コロニアル様式の外観を持ちます。

現在、本館は「日立目白クラブ」として、寮舎は「日立製作所」の社員寮として利用されています。

### 「昭和寮」の建築について

#### 本館

本館はRC造地下1階、地上2階建、建坪は約1,252坪で、階段室の3連の細長いアーチ窓と煙突が段状に並んだところが特徴的です。また玄関ドアをはじめ各所には、直線的な幾何学模様がデザインされており、アール・デコ様式の特徴がみられます。

平面計画は、1階には食堂、娯楽室、談話室等の生徒施設、2階には読書室の他、会議室、応接室といった教員施設で構成され、地階には、寮生用の浴室と厨房がありました。明治期の学習院では付属施設であった食堂や浴室は本館に組み込まれ、特に、談話室と食堂はドアを開ければ一室となり、格式ある中心的空間として計画されました。

現在、2階の屋上には写真スタジオが増築され、読書室は二つに隔てられ、神殿として利用されていますが、地階の浴場は、引き続き社員寮の施設として利用されています。

## 寮舎

4棟の独立した寮舎は、本館同様RC造地下1階、地上2階建、建坪は平均336坪で、第一寮が14室、他が12室と合計50室からなります。寮生室は自習室と寝室を兼ねた個室で、一室の面積は約14㎡（3.6m×3.6m）と、当時の寄宿舍では極めて広く、アメリカの寮の部屋面積同様のものであったと考えられます<sup>注3</sup>。

4棟の建物の外観の意匠や平面計画には共通した要素がありますが、各棟の平面プランがすべて異なっており、それが外観に反映されることで、個性豊かな空間を生み出しています。外観の共通要素としては、1階の角窓、2階のアーチ窓等の開口部や、パラペットの十字型の意匠が挙げられます。

平面計画では、寮生室が東南側の良好な位置に置かれ、北側に階段室、洗面所等の水廻りが設けられていました。部屋をずらして配置し角部屋を多くすることで、採光、通風に配慮した計画がなされました。また第2寮の2階には、洋バスと洋式便器を備えられた皇族室がありました。

寮生室は、従来どおり洋室で、各室にはカーテン付きのベッド、机、レザー張りの椅子、本棚が備え付けられており、個室である上に、さらに充実した設備が整っていたことが窺えます。

## おわりに

以上、竣工時の「昭和寮」について振り返って見ましたが、「昭和寮」は、格式ある本館と、ゆとりある個室を有する寮舎から構成されていたことがわかりました。平面計画、外観、室内意匠にわたり、各建物に統一性を持たせながらも、個性を活かした設計がなされていたことが、その特徴といえます。

このような昭和寮の空間構成は、学習院の教育方針の転換により、欧米の寄宿舍制度の影響を受けて計画されたものですが、外観や室内意匠は、当時の日本の流行である、スパニッシュ・コロニアル様式を中心に、各所でアール・コ様式を採用したものでした。以上から、欧米の寄宿舍制度の骨格を取り入れながらも、昭和初期の日本における建築的潮流を

表現したものが、「昭和寮」であるといえるでしょう。

## ※注

注1) 宮内庁書陵部所蔵『工事録内匠寮』、『関係図面録内匠寮』

注2) 『工事録内匠寮』昭和2年二十七による。設計者は、「東京都庭園美術館（旧朝香宮邸）」を設計した権藤要吉といわれているが、建築画報社発行の『皇室建築』（2006年）でも指摘しているように、森泰治の設計であると思われる。

注3) 『高等建築学第20巻』柘植芳男著・常盤書房発行・昭和10年

p369 第11.2表「我国寄宿舍の室面積」によると個室の面積は7.45㎡で、アメリカの室面積は15㎡前後である。

## ※参考文献

1. 拙稿「学習院・昭和寮についての復元的考察」（『2006年度日本建築学会大会学術梗概集』投稿済）、「学習院・校舎建築についての復元的考察」（『2003年度日本建築学会関東支部研究報告集』）他
2. 『学習院百年史・第一編』学習院発行1981年

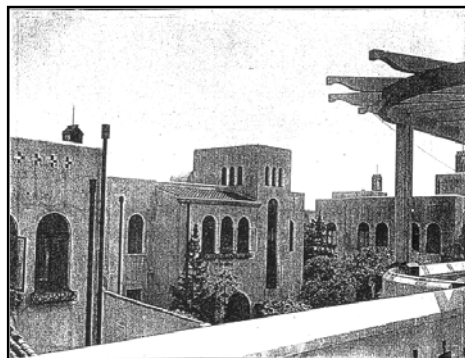


写真1 昭和10年 本館屋上より寮舎をみる 学習院所蔵



写真2 寮生室の内観『学習院百年史』より

## ■起雲閣(旧内田信也及び根津嘉一郎別邸)の来歴

熱海市指定有形文化財(平成14年3月26日指定)

NPO RICH 理事 松波 秀子

今春、起雲閣 洋館(金剛・ローマ風浴室)改修・復元工事が竣工しました。この改修・復元は、平成15年度の和館(麒麟・大鵬)、同16年度に洋館(玉姫・玉溪谷)に続くものです。NPO RICHは、上記のうち、2棟の洋館について、同工事を施工した清水・石井特定建設工事共同企業体からの依頼を受けて、史的調査および復元の監修を行いました。

昨年度、起雲閣の見学に訪れたのは、およそ84,000人、熱の文化観光スポットとして定着しています。今回は、別荘としての創建から、旅館を経て、文化財として保存活用に至った現在までの「起雲閣の来歴」を紹介するとともに、洋館2棟の見所について述べたいと思います。

なお、建物名称については、各棟とも、起雲閣時代に呼称されていた室名が用いられています。

### 起雲閣の来歴

#### 内田信也による熱・別邸の創建

大正7年、当時、船成金として知られ、後に鉄道大臣となった内田信也が、現在地に619坪余の土地を入手し、翌8年に和風の別邸が完成しました。創建時の遺構として、和館(麒麟・大鵬)、和館(孔雀)、門、土塀、土蔵が現存し、このうち、和館2棟と門が熱市の有形文化財に指定されています。

和館(麒麟・大鵬)の棟木には「大正八年四月吉日上棟 大工棟梁石川吉吉」の墨書があります。石川は、吉田鉄郎設計の馬場氏熱別邸の建設も手がけています。当初、2棟の和館は並んで建っていましたが、旅館起雲閣となってから、和館(孔雀)は、二度移築・改造され、庭園内の現在地にあります。

#### 根津嘉一郎による別邸の拡大と整備

内田別邸の完成からわずか5年後の大正14年、土地、建物とも、東武鉄道グループの創始者で鉄道王といわれた根津嘉一郎に売却され、根津家の熱別邸となりました。根津は、その翌年から隣接する土地を数度に渡り購入して敷地を拡げ、2棟の洋館をはじめ温室や附属家を新設し、昭和総面積2,800坪、現状とほぼ同面積の広さとなりました。なお、昭和2年に購入した土地に、温泉源が見つかり「根津温泉」と名付けられました。後、温

泉源のある1坪は文筆されて「鉾泉地」に地目変更されました。

昭和4年、根津の趣味である古美術の収集品を装飾に盛り込んだ客室、ベランダ、玄関広間、広々とした浴室をともなう洋館(金剛・ローマ風浴室)が竣工しました。内外の仕上にも工芸品のような材料を用いた数奇屋風の雅趣ある建物です。これと同時に、庭園の築造もすすめられました。根津の庭園好きは夙に知られ、築庭の際には、自ら現場を指揮し職人に混じって働いたと伝えられています。

昭和7年、既存の旧内田別邸(和館)と渡り廊下で連結し、玄関広間、食堂、サンルーム、客室からなる洋館(玉姫・金剛)が竣工しました。これにも、古美術収集家、茶人としての根津独自の趣向がふんだんに盛り込まれています。

昭和15年には、敷地の南隅にE字型と一列型の温室が建設されました。後者は戦後間もなく解体されましたが、前者は昭和30年代まで存続しました。

これらの建物は、合資会社清水組の設計施工になります。当時の図面の、図面表題欄の印座には、大友、廣江、伊藤、海野、八木らの印影が見られますが、主担当は大友弘、担当は廣江文彦でした。大友弘は、明治21年生まれ。同37年に清水満之助店に入店、入店後工手学校に通い、同40年に卒業。以後、設計一筋を通し、初期には左右田銀行東京支店、大倉書店、川崎銀行佐原支店など商業建築や個人邸宅を多く手がけました。昭和9年には住宅設計課長、同18年には設計課長として、後身の指導にあたりました。昭和37年逝去。根津別邸のほか、新潟市の鍋茶屋(昭和6年・12年、国登録文化財)、同市の新津恒吉邸(昭和13年、国登録文化財)、東京築地の錦水(昭和4年、現存せず)、五反田の正田邸(昭和8年、現存せず)、新潟県越路町の松籟閣(旧平澤家住宅)(昭和9年、国登録文化財)銀座の花蝶(昭和12年、現存せず)などの作品があります。

ちなみに、東京青山の根津家本邸のあった広大な敷地に、根津のコレクションを母体に根津美術館が創立されたのは昭和14年で、翌15年に開館しています。

#### 桜井兵五郎による旅館「起雲閣」の開業

昭和19年、根津家はこの別邸を手放し、終戦を迎えました。一方、石川県金沢市郊外の湯涌温泉でホテル「白雲楼」を経営していた実業家桜井兵五郎は、白雲楼が米国進駐軍に接収されて事業が出来なかったため、

熱海で旅館を経営することになり、昭和22年1月、旧根津別邸のほとんども購入し、同年10月22日に旅館「起雲閣」を開業しました。開業当初は、基本的に根津別邸をそのまま客室として使用していましたが、以後、増改築を重ね、平成初めには現在の規模になりました。起雲閣には、山本有三、志賀直哉、谷崎潤一郎、太宰治、舟橋聖一、三島由紀夫らの多くの文学者、政財界の著名人、文化人が訪れました。

### 熱海市による起雲閣の保存活用

平成11年、起雲閣は閉業し管財人の所管となりましたが、翌12年、熱海市が買い取り、国土交通省による「まちづくり総合支援事業」の一環として、起雲閣の保存活用をすすめることになりました。同年、起雲閣の戦前の和館2棟、洋館2棟、門の予備調査を実施すると同時に、同年10月には、内装の簡易修繕、外構の整備を終え、一般公開されました。

平成13年、「まちづくり総合支援事業」による2ヶ年の「起雲閣の保存活用整備事業計画」策定作業が開始され、事業計画検討委員会、起雲閣専門会議を設置し、まちづくり事業計画を策定しました。平成14年3月には、前々年に調査した和館(麒麟・大鵬)和館(孔雀)、洋館(金剛・ローマ風浴室)、洋館(玉姫・玉渓)、門の4棟1門が熱海市有形文化財に指定されました。

平成14年度には、これらの保存建物の改修復元工事のための事前調査が実施され、報告書がまとめられました。調査結果を踏まえて、「保存活用整備計画」が策定され、この計画に基づき、冒頭に述べましたように、平成15年度より4期にわたり、和館(麒麟・大鵬)、洋館(玉姫・玉渓)、洋館(金剛・ローマ風呂)、和館(孔雀)の改修・復元工事が実施されることになりました。

### 洋館(金剛・ローマ風浴室)

当初の設計図面によれば、暖炉の上飾りには、いかにも根津好みの、中国の画像石、磚、古瓦をちりばめる案と、陶雅堂タイルを張る案がありましたが、実際には、粗面仕上の小室石積です。しかし、この野趣ある石積が逆に暖炉の趣を増す結果となりました。暖炉のある客室の床は板張になっていましたが、古写真からタイル敷であることがわかり、復元しました。西側のベランダの床には当初のタイルが現存しており、その陶芸的な布目タイルに倣い、釉薬など何度も試作を重ねて、復元製作しました。ベランダ室の天井には、失われていたステンド

グラスを復元しました。ローマ風浴室は、何種類もの凝ったタイルが張られていましたが、昭和60年代に道路拡張のため、位置と向きを変えて建て替えられ、内外装のほとんどが改変されてしまいました。テラコッタ製の湯出口と窓のステンドグラスが残るのみです。

当時の竣功報告書には「根津嘉一郎氏邸別邸ガーデンハウス及び浴室新築工事」と記されています。このガーデンハウス(園亭)は、東京西ヶ原の渋沢栄一飛鳥山別邸のガーデンハウス「晩香廬」(大正7年、田辺淳吉設計)との共通点を多く見出すことができます。特に、全体の基本プラン、玄関広間廻りの意匠は、ほぼ同じということができます。当時、晩香廬は、洋風の数奇屋感覚の佳品として賞賛されると同時に、工芸と建築の提携という新しい試みがなされ、注目されました。この建物も、アーツ・アンド・クラフツ建築の流れを汲む数少ない事例の一つということができます。

ただし、現在の家具類は旅館が備えたもので、当初の家具類は一切遺っておりません。

### 洋館(玉姫・玉渓)

既存の和館とつなぐ渡り廊下は、小橋を架けたようなしつらいでアプローチを演出しています。

暖炉のある客室では、暖炉右脇の風蝕した古い円柱が、まず、目に着きます。おそらく根津の収集品の一つで大和の古寺の柱材であったと思われます。暖炉上飾りの仏像レリーフを古写真に基づき復元しました。

食堂は、桃山風の華やかな格天井、長押、欄間、建具の造作など、和風の色濃い意匠です。繰形などの細部には一部中国風の意匠も見られます。格天井の折上部分の支輪の間と格板は金唐革紙張、格板中央に金彩を施し極薄の紗を張っています。

食堂に続くサンルームは、天井全面をステンドグラスとし、床はカラフルなモザイクタイルの模様張。腰壁のトラバーチン張の目地は貝片を入れた螺鈿風。庭に面した大きなガラス戸には紫外線を透過するVITAガラスが用いられています。当時は紫外線が健康に良いとされてきました。ステンドグラスには、切子細工や透し加工が施されたガラスも見られます。豊かで華やかな仕上げですが、明るい透明感が支配的で食堂のような重々しさはありません。なお、現在の照明器具、家具類は、戦後に旅館が備えたもので、当初のものではありません。

## ■平成 18 年度講演会・見学会の予定

平成 18 年度において以下の講演会および見学会を予定しております。今年度は主にまちづくり、景観保全に焦点を当てた内容を企画しております。ぜひふるってご参加ください。詳細は決まり次第ご連絡いたします。

### ◆見学会および講演会

#### [明治村見学および講演(題目未定)]

- 月日 平成 18 年 10 月 13 日(金)
- 場所 博物館明治村(愛知県犬山市)
- 講師 飯田 喜四郎  
(博物館明治村館長, 当法人理事)

### ◆講演会

#### [東京の水辺空間に関する講演(題目未定)]

- 月日 平成 18 年 9 月 13 日(水)
- 場所 清水建設技術研究所(東京都江東区)
- 講師 陣内 秀信  
(法政大学教授, 当法人理事)

#### [地域のまちづくりに関する講演(題目未定)]

- 月日 平成 18 年 11 月 9 日(木)
- 場所 清水建設技術研究所(東京都江東区)  
(予定)
- 講師 西山 徳明  
(九州大学教授)

#### [都市の景観に関する講演(題目未定)]

- 月日 平成 19 年 2 月 2 日(水)
- 場所 清水建設技術研究所(東京都江東区)
- 講師 西村 幸夫  
(東京大学教授)

## ◆平成 17 年度 理事会・総会 予定

### 会員懇親会へのお誘い

平成 18 年度 理事会、および通常総会を平成 18 年 6 月 28 日 午後 3 時より、昨年と同じく東京目白にある、「日立目白倶楽部」(都選定歴史的建造物)で開催致します。

午後 5 時より、同会場にて会員懇親会を開催いたします。ぜひ皆様のご出席をお願いいたします。(会費無料)

- 参加申込・問合せなど

- E-mail: rich\_mail@npo-rich.jp

または FAX: 03-3820-5955

NPO 法人歴史建築保存再生研究所 まで

## ■平成 17 年度実施調査業務

### [高齢鉄筋コンクリート造建築物の評価手法および修復技術に関する基礎的調査業務]

大正、昭和初期に建てられた官公庁施設の保存・再生を検討する上で、鉄筋コンクリート造の歴史的建造物の評価、修復技術の内、補強、修復技術の調査業務を財団法人建築保全センターより受託、実施しました。

### [山口銀行保存調査報告書作成支援業務]

旧山口銀行保存修理工事において、その保存調査報告書の作成支援を行いました。

### ■会員募集のご案内

特定非営利活動法人歴史建築保存再生研究所では、活動主旨に賛同される方、また関心のある方には、ぜひ会員となって活動を支えて頂きたいと思っています。

入会をご検討される方は、下記、問い合わせ先まで FAX、または Eメールでご連絡ください。募集要項をお送り致します。

お問い合わせ

特定非営利活動法人歴史建築保存再生研究所 事務局

FAX: 03-5245-1996

Eメール: rich\_mail@npo-rich.jp

## ■ 寄稿

### 「柱を建てる」

当NPO法人 理事長 藤盛紀明

先日ようやく三内丸山遺跡を訪ねてきました。5500年前から4000年前の縄文時代に巨大な柱が建てた作業（工事）にはやはりびっくりです。直径1mのくりの木が六本、4.2mの間隔で建っていたのは圧巻でした。堅いくりの木の伐採は大変なことであったでしょう。

古代の人々は自然の中に神を見ていました。三内丸山の時代はイギリスのストーンヘンジの時代と重なると思われます。古代においては神への祭祀として世界の各地で建てる行為を行っていました。建てるという行為は建設技術の中で最も古い技術とされます。人力で建て起こすことの出来る重量や寸法には限度があります。盛土の利用など色々な工夫がなされたことについての推理がありますが、人類の知恵は素晴らしいものです。

建てるためにはその材料を切り出さなければなりません。石器時代に巨大な柱や石を切り出す技術もまた工夫が必要であったと思われます。鉄の発明以前に巨木や巨石の伐り出す（切り出す）ことは大変な労力であったと思われます。石斧による木の伐り出しの実験の論文を見たことがありますが、やはり大変です。大変と言うのは現代人の感覚で、古代人にとっての時間は悠久で、案外その長い時間を楽しんでいたかも知れません。

伐り出しのあとには運搬作業があります。これも重要な建設技術です。最近でも揚重・運搬は生産性向上の最重要項目となっています。エジプトのピラミッドも三内丸山に重なる時代に建設されています。あの石材はナイル河を利用して運ばれて来たと思われます。日本列島でも古墳時代には阿蘇山の巨大な石が海上を近畿地方まで運ばれてきました。近年発掘された明日香の亀形石造を含む水祭祀遺跡の材料運搬では、川の利用と人口運河の利用がなされたことが報告されています。三内丸山の場合には遺跡内あるいは近傍の栗の木の伐採と思われますので、運

搬は差ほどの作業では無かったと予想されます。

平安時代「口遊」（書物）の中で「雲太、和二、京三」と言うのがあります。当時出雲大社が最も高い建築物で、つい



で東大寺大仏殿、平安京大極殿の順であったとする意味とされています。出雲大社の最も高い時は32丈（約96m）あったとされます。高い柱の上に社が建っており、高く柱を建てるという祭は縄文以来継続していました。出雲大社は平安時代から鎌倉時代までの間に6あるいは7回倒れたと記録されています。「風も無いのに倒れた」とする記録もあります。

柱を建てる技術はあったが、倒れるのを防ぐ技術はなかなか進歩しなかったのでしょうか。柱を倒れるのを防ぐために柱穴を深くしているのは三内丸山遺跡でも見られ、弥生時代の掘立柱建物にも見られます。その後上部構造の結合技術が向上し、建物構造が安定化すると石の上に柱を建てる礎石造が発達するように思われます。三内丸山の柱穴の深さは2mもあったとされていますから上部構造はかなり未熟かあるいは無かった可能性があると思われます。現在の復元構造にはまだまだ疑問が残ります。

柱を建てる技術は古代も今も重要な建設技術であり続けています。地震のエネルギーは地面から柱に伝わりますから、今後は柱を如何にして地面から切り離すかの技術がますます重要となるでしょう。

●原稿を募集しています。

歴史建築保存再生研究所では、活動に関連する、経験談・意見・感想・見学手記など、さまざまな原稿を募集しております。原稿の体裁は問いません。事務局までお送りください。よろしくお祈りいたします。